

養護施設児に対する心理学的援助

大西俊江*・山下由利子**・伊藤俊子**

原 智子***・林 光玉****・足立富美子*****

Toshie ONISHI, Yuriko YAMASHITA, Toshiko ITO,
Tomoko HARA, Mituki HAYASHI and Fumiko ADACHI
The Psychological Supports for Children in the Institution.

〔キーワード：施設入所児 心理学的援助 プレイセラピー カウンセリング 甘えと攻撃〕

I. はじめに

何らかの理由で親に養育されず、養護施設に入所している子どもは、厚生省の社会福祉施設調査によれば、1993年は、全国で530施設で、26,511人いる。養護施設は、少子化の影響もあって、全国的に定員割れが目立ち、10年前の1980年の30,787人に比べて減少傾向にあるが、父母の「行方不明」「離婚」「入院」などの親の実質的不在という理由の他に、父母の「虐待・酷使」「放任・怠惰」などの理由で入所する児童はむしろ多く、養護問題が減少しているとはいえない現状がある。

現在養護施設に入所している子どもたちの中には、不登校、非行体験、情緒的な問題など発達上の問題が多様かつ複雑に生じてきている者も多く、入所児の年齢も高くなってきているのが特徴である（「子ども白書 '94」）。全国養護施設協議会資料によれば、15才以上の入所児童は、1978年は入所児童総数に対して10.6%であったのが、1992年には22.2%を占めるようになっている。

家族から切り離されて養護施設での生活を余儀なくされている子どもたちは、親や家族の経済面、健康面、行動面などの深刻でさまざまな問題を抱えており、また最近顕著な傾向として、親や家庭は存在していても、親子関係が希薄であったり、親の養育機能が欠如していることから生じる養護ケースは増加していると言われている。このことは、現代社会にひそんでいる精神面の貧困さから起こる多くの問題を象徴的に現わしていると言える。

われわれは養護施設児に対して心理的援助の必要性を痛感された養護施設の長からの依頼を受けて、1990年か

ら数人の子どもたちに個別に関わってきた。そこで直面した養護施設の状況や問題に関して、入所児童の事例を通して考察した（大西、伊藤1992）。

本研究では、施設入所児に個別に心理学的援助を行う中で、子どもたちが抱えている共通の問題を明らかにし被援助者（施設入所児）と援助者との関係性、さらに心理学的援助の意義（効用と限界）について検討する。

II. 研究方法

1. 対象

1) 被援助者（施設入所児、以下対象児とする）9名
事例（対象児）の概要（表1）

対象児について、年令、入所時年令、家族、面会の有無、帰省先を表1にまとめた。記述にあたっては匿名性を保つように配慮した。

2) 援助者（カウンセラー、以下Coと記す）5名
事例の匿名性を保つために5名の援助者をアルファベットで表記した。全員が女性でd以外は、既婚者でありa, b, cは、育児経験がある。全員、臨床心理学を専攻し、カウンセリング実習を履修している島根大学教育学部大学院生、学部生、および研究生である。担当は表2の通りである。

2. 期間 1990年7月～1994年7月

3. 場所 A市内にあるB養護施設内の面接室

なお、B養護施設の概要は表3-1～表3-6の通りである。

4. 方法

* 島根大学教育学部教育心理研究室
*** 勤誠会 米子病院

** 島根大学教育学研究科学校教育専修修了(1994)
**** 島根大学教育学研究科学校教育専修

***** さとうクリニック

表1 事例の概要 (1994年7月現在)

対象	性別	現在の年齢	入所時年齢	家族	面会有無	帰省先
A	女	8才	3才	母(未婚)		面接を開始してまもなく初めて本児の母親が現れ、その後長期の休みは母のところに帰省
B	女	11才	8才	母(離婚)	あり	月に一度は母のところに帰省
C	男	13才	3才	父(生別・住所不定) 母(生別・行方不明)	なし	なし
D	男	11才	3才	母(離婚)は他の男性(子ども有り)と同棲中	なし	夏休みなどの長期の休みに、母のところに帰省
E	女	14才	8才	義父 弟 妹 母方祖母 母(行方不明、8才の時離婚) 実父行方不明。	あり	あり 休みごとに帰省
F	男	10才	8才	父(死亡) 母(死亡) 長兄(婿養子) 姉 次兄 三弟(里子)	あり	あり 姉のアパート
G	男	15才	11才	父(死亡) 母 長姉 次姉	あり	隔週土曜の夜、母のところに泊る 長期の休みにも、母のところに泊る
H	男	16才	8才	父(死亡) 母 三女は結婚 二女は授産所 兄 妹 弟二人	あり	あり 母、妹、弟二人。1才上の兄が施設を出て左官として同居
I	女	16才	15才	父 母 弟二人 妹二人	ほとんどなし	あり

表2 援助者(カウンセラー)の概要

援助者		育児経験の有無	対象児
a	既婚	有	C
b	既婚	有	E F H
c	既婚	有	D G
d	未婚	無	A B
e	既婚	無	I

表3-1 施設入所児の年齢構成

性別\年齢	幼児(1才~6才)	小学生(6才~12才)	中学生(13才~15才)	高校生、その他(16才~18才)	計
男	5	7	8	8	28
女	6	8	2	7	23
計	11	15	10	15	51

表3-2 入所児の年齢

性別\年齢	3才未満	3才~5才	6才~12才	13才~15才	16才以上	計
男	3	10	7	7	1	28
女	3	6	9	5	0	23
計	6	16	16	12	1	51

表3-3 面会の状況

間隔	週(1回)	月(1~2回)	学期(1~2回)	年(1~2回)	無	計
人数	4	15	11	11	10	51

表3-4 帰省先の有無

帰省先	保護者	兄弟、親せき	無	計
人数	41	8	2	51

表3-5 保護者の状況

	両親	父・継母	継父・母	父	母	継父	継母	その他	計
男	3	1	2	6	14	0	0	2	28
女	7	2	1	2	11	0	0	0	23
計	10	3	3	8	25	0	0	2	51

表3-6 入所理由

性別\理由	傷病(入院含む)	家出(失踪含む)	離婚	死亡	棄児	家族環境	その他	計
男	7	3	3	0	2	8	5	28
女	5	0	6	0	0	7	5	23
計	12	3	9	0	2	15	10	51

※「家族環境」とは、保護者の児童に対する虐待もしくは放任、不平等のため、あるいは保護者の精神障害や性格上の問題等、家族環境が児童の看護、養育上不適当な状態にあるもの。

※表3-1から表3-6は、養護施設長より提供(1994.6現在)
※数字は人数

- 1) 各援助者は、施設側から特に心理学的援助が必要であるとして紹介された子どもに個別に、週1回50～60分のプレイセラピーないしは、カウンセリングを行う。援助者は、非指示的、受容的態度で接するよう心がける。
- 2) 各事例に対して、大西がスーパーヴィジョンを行なう。
- 3) 継続的に事例検討会を行ない、グループスーパーヴィジョンの場をもつ。
- 4) 年に1～2回施設職員との合同の事例検討会を開き相互の意志疎通を図る。

5. 分析方法

各援助者が、被援助者(対象児)の概要、面接経過を記録(子どもの理解が得られた場合は、録音テープによる記録もある)をもとに、以下の観点からまとめる。

- 1) 対象児との面接経過を通して最も感動したこと
- 2) 印象に残っていることばやできごと
- 3) 援助者側の問題、特に不安、無力感を感じた時
- 4) 「甘えと攻撃」の表現について
- 5) 面接経過からみた対象児の変化
- 6) 施設内面接の長所と短所
- 7) 心理学的援助の意義

III. 結果

1. 対象児の問題と心理学的援助(面接)について

9名の対象児について面接開始時に施設から出された問題、面接回数、面接の形態などを表4にまとめた。施設から出された問題としては、情緒不安定、反社会的行動(嘘言、盗みなど)、対人関係がうまくいかない(いじめ、友人が出来ないなど)といった問題の他に集団生活での不適応といった施設特有の問題がある。面接は、対象児の内的変化や行動上の変化が見られ、両者が納得して終結した事例(B, G)と外的状況(家庭ひきとり就職、面接者の就職)により面接に心を残しながらの終了(E, H, I)がある。それ以外は、現在継続中が4例あり、中でもCは、4年間にわたって面接が継続している。面接形態は、対象児が小学生が多いため、ほとんどプレイを通して内面の表出や、関係の深まりが進められた。

2. 面接経過

面接経過から対象児とCoとの関係性をふりかえり①最も感動したこと ②印象に残っていることばやできごと ③Coの問題、特に面接に不安や無力感を感じた時

表4 対象児の問題と面接回数及び形態

対象児	初面接時年齢	施設から出された問題	面接回数	面接形態
A	7才	多動で感情に波があり、情緒不安定。	34回継続中	プレイ中心
B	9才	落ち着きがない。整理整頓が出来ない。上級生からは「お前は謝まん」と言われて嫌われており、友達が出来ない。	33回終了	プレイ中心
C	10才	万引き等反社会的行動があり嘘言・空想が多く寮内のトラブルメーカー。目を見て対話することが出来ず言っている事を理解しているかどうか判らない。	128回継続中	プレイ中心
D	11才	発達の遅れがあり、低学年の子とは遊べるが同学年の子と遊べない。授業についてゆけない。	13回継続中	プレイ中心
E	12才	清潔面の事がきちんとやれない(尿で汚れた体をきれいに拭くことや、汚れた衣類を洗濯に出さずたくさんため込んでいる)。勉強面、生活面で捨てばち。逃避的態度。	28回終了	箱庭(9回)中心の面接からプレイ中心に
F	12才	小5の夏休みを境に何度も問題をおこす(無断で学校、学院を抜け出し反社会的傾向が出てきつつある)。虚言が多く平気で嘘をつく。	15回継続中	箱庭(6回)とプレイ
G	13才	おとなしくて、いじめの対象になりやすい。「嫌」と言えない。	47回終了	箱庭(17回)とプレイ
H	15才	問題行動(窃盗癖がある)、人間関係づくりに問題がある(人に心を開かない。他児とのトラブルはほとんどないが表面的な付き合いにとどまっている)。	45回終了	歌のテープを流しながら各種のゲームをしたり話をすすめていったりした
I	15才	力の強い児童に距離をおき年下と遊ぶなど対人関係に問題。進路や対人関係に関してわずかなことで不安に陥る。学力の回復を個別に関われる指導者が必要。	26回終了	言語中心、プレイ

④「甘えと攻撃」の形態 ⑤対象児の変化の5つの項目についてCoそれぞれが対象児ひとりひとりについて記述したものを表5～表9にまとめた。

3. 施設入所児への心理学的援助と意義

筆者らは、施設に出かけて行ってその1室を面接室として使用させてもらっている。施設内で面接を行なうことの長所と短所をCoひとりひとりが列挙したものをまとめると表10ようになる。

また、プレイを中心とした対象児への継続的なかわりは、子どもたちにとって日常生活では得られない経験

表5 最も感動したこと

対象	面接経過中、最も感動したこと
A	それまで全く連絡のなかった母親が突然面接中（#10）来所し、面接室で母が持参した新しい服に着替えて母に会いに行ったこと。
B	サザンオールスターズの「涙のキッス」の楽譜を、二人で画用紙にかきあったり、また「茶色の小瓶」を一緒に連弾したりして触れ合えた感じがした時（#19）。一人でCoのためにお茶の用意をしてくれて学校の話やテレビの話をしながらかんだこと。
C	今まで行っていた母親殺しを#69でもう一度行ない、その母を火葬にし僧侶シスターの立合いのもとでお経を唱えおごそかに喪の仕事が行われ、次回は両者とも発熱してしまった。
D	Coが面接のため、職員室で鍵をもらい面接室に向かって歩きはじめると、どこからともなく現れて、Coの前2～3mを歩いて行くことが続いている（Coは、面接時間に遅れたわけではない）。待っていているD君の気持ちが伝わってくる。
E	#15から口紅に関心をもっていた彼女はCoの持っている口紅を「つけてみて」とたのむ。CoとEさんは向き合いCoは真剣に紅を引いていく。彼女も緊張している。それは、女の子から大人の女への門をくぐる儀式のようであった。その日は奇しくも「ひなまつり」、彼女との面接も後わずかとなっている頃であった（#26）。
F	箱庭の中央に大きな島をつくりそこには人や家や木や車がおかれた。その島の右上に小さな無人島がつけられた。やがてF君は「無人島では淋しいし、誰を置こうかな」と考えていたが「お母さん」と思いつくと、赤ちゃんを抱いたお母さんを家の前に置いた。はじめてはっきりと「お母さん」が登場し、それは2才半で亡くなった彼の「お母さん」であるかと思われた（#15）。
G	終結について話した（#46）とき、もう大丈夫だと言い、最後の面接時（#47）に、静かにCoと道具の交換（ゼロテープと定規）をしたこと。
H	最後の面接。「別れ」に直面することがH君は堪え難かったであろう。眠そうにして不機嫌なままの25分間であり、いつもみせる笑顔は一度としてなかった。初回と最後の回があまりに対称的でありここに至るプロセスの凝縮が脳裏をかすめると同時に「別れ」が一層Coの中で深みを持って思い出されてならない（#45）。
I	Coが別れを告げた回の終わりに他の施設児がCoに「〇〇ちゃんのお母さん？」とたずねたのでCoが「Iちゃんのお母さん」ときっぱりという本当にうれしそうな顔をしたこと。

表6 印象に残っていることばやできごと

対象	印象に残っていることばやできごと
A	裸にしたリカちゃん人形と男子学生の人形を離れないように赤いリボンでぎゅっと結んだ（#5）。「結婚したら好きな人と一緒に寝るし、お風呂に入るんだよ。好きな人が出来たらその人と一緒に暮らすんだよ」。「私、時々怒りたくなる事があるに」。テープをきいている時、お母さんの話題になり、「あの人がお母さんじゃなければよかった」（#25）。
B	「もっといろんな所で遊びたい」というので「ここだけじゃ駄目かな」ときくと、「ここは牢屋みたいだし、いろんな人が来るもん」、「お姉さん何して遊ぶばっかだもん」（#17）。（#26、図工の宿題のほりこを面接室に持ってきてそれを作りながら帰省の話）「あんまり家に帰る人おらんけー、あんまり家に帰ったら悪いが」「こっち（施設）に来るときつらいが、お母さんと別れる時」。
C	「お母さんがいなくて寂しかったんで、一度お金をとってみたかったんです」（#36、万引きのシーンで）。
D	（終了時、持ち込んだ玩具を全部袋に入れたかどうか「わすれものない？」とCoが尋ねると）「先生も来るの忘れないでね」（#2）。（キン消しで遊びながら）「こんなのあったら僕だけ用に持って来てね」（#9）。
E	笑顔の女の子の絵の横に怒った顔を描き「本当の心は怒っているんだよ」（#24）。箱庭をつくりながら中央に花を植え「花を大切にしましょう」と何度か標語のように言う。「ピエロもいいけど粗末にされなかったらお花になりたい」（#3）。
F	「お兄さんがここ（施設）出ると、僕ひとりぼっちになってしまう」（#9）。「お父さんは4年生の時に死んだよ。お母さんは…オレ、一度も見たことがなかった」（17）。
G	（苛められる辛さを語って）「精一杯刃向かっているけど、恐怖心が爆発しそうだ」（#6）。「ここ（施設）は地獄だよ」（#6）。
H	体罰を受け痛々しい状況の中で「叩かれたら痛いわね」と発したCoに返ってきたのは情緒の応答性のない「なんで？」という問いかけだった（#4）。「情熱の蓄積って曲知ってる？あの曲聞いた後で何かが起きるよ。オレ、ある事が起こったよ。それはすごくいい事だし、すごく嫌な事でもあるよ。どっちにもとれるよ」（待っていた会社の寮に入ることが決まってきた事。それは面接の終わりも意味する。）（#43）。
I	「うち、いいことがあると不安になるに。その後が怖い。祭りのあと」（#7）。「いい事があると必ず後が怖いからなー」（#15）。「すみませんねー」が口癖。

表7 援助者側の問題

対象	援助者側の問題（特に不安・無力感を感じた時、こと）
A	<p>自分の要求が聞き入れられないと（例えばジュースを買って欲しいという要求）、Coがことばでどう伝えても取まりがつかない時。面接に友達を連れて来る事が何度か続いた時。面接中一緒に友達と公園に行き、一人とり残された時。</p> <p>ある要求を聞き入れると、次から次へと要求が高まってきて、あふれだす要求についてゆけなかったこと。彼女の中の寂しさや怒りは、傍にいてCoが感じるものよりももっと深いものではないかと思った時。</p>
B	<p>面接室の玩具を勝手に持ちかえったとき（＃4）。かくれんぼをしているのに、他の遊びに気が移ってるみたいで鬼になったCoを、見つけてもらえるか不安になった（＃14）。</p> <p>窓越しに学校の知人と話をしている、どうしてここにいるのか聞かれた時「ここはお母さんとかが仕事をしていたり、親がおらん子とか死んでしまった人が泊るとる」と言っていて、傲慢なようだけど面接をしていたからといって、彼女の状況は変わらないのだなと気づいた時。</p>
C	<p>プレイの中で輸血によって母子の契りを固め、リカちゃん人形を使い結婚、出産、親子三人の生活を再現させ、その後時間延長をきっかけにCoに対して激しい攻撃を向け制止するCoの声に対して虚ろな目付きでいた時（＃58）。</p> <p>箱庭の中に広島原爆ドームを作り「かわいそうだ」「僕…ここ（広島）に生まれていればよかった。…ここなら死んでいるもん」と一人身の淋しさをぼつりと語った時（＃37）。</p>
D	<p>闘いのテーマで遊びが展開し、D君は一人でその世界に浸っている。Coは一人でも何かD君と関わりを持ちたいと思い、D君の遊びの内容を言語化している。D君もそれを受け入れてくれており（＃9）。「先生前みたいに言って。僕動かすから」と言う。「風邪をひいて声が出ない（＃10）」と言うCoに「小さい声でもいいよ」とも言う。しかし、言語化しながら、Coは延々と続く闘いの場面に、眠気を感じている。D君と闘いの世界を共感しきれない自分に無力感を感じてしまう。</p>
E	<p>大きな金髪の人形を面接室にもちこみ遊んでいたが、その人形の長かった髪をバツサリと切ってしまう。「切らなきゃ良かったと後悔している」そう言って彼女は、その後二度とその人形を持ってこなくなった。今も彼女は髪を切ることでなにを期待し何を失くしたのか気がかりである（＃14～＃17）。</p> <p>箱庭やプレイの中で通常は怪獣をやっつけにくるはずのウルトラマンが、怪獣と同じレベルで戦ってしまったり、神の使者である天使がまるで悪魔のようにむごい裏切りをしたりする場面に合うと、彼女の深いレベルでの大人に対する不信感に自分のどうしようもなさを感じてしまう。</p>
F	<p>面接の後見送ってくれるF君であるが、別れぎわ、くると背を向けて「じゃあまたね」と目も顔もむけない。それでいて振り返えると何度も「バイバイ」「来週ね」と手をふっている。「幾度もの別れ」を経験してきた彼の心の傷の深さが心配される。</p> <p>箱庭をつくるたびに「人がいないとね、にぎやかじゃないとさびしいもんね」という言葉と、仕事を終わって家に帰ってくるお父さんの登場に、彼の淋しさの大きさを感じた時（＃7～＃15）。</p>
G	<p>自分は暗い人生だと言い、出口のない気持を述べる。気持の休まる時のない日々の様子を話し、耐えられそうにない、自殺をするしかないと言った時（＃12）。帰省の予定だったが、昨夜、母親から電話があり「『米がないから、帰ってくるな』と言われた」と語り、食べる物が無くても帰省したいと述べた日。友人にお金を返してもらってお米を買うつもりだというのが acting out を起こさないかと不安を感じた（＃22）。</p>
H	<p>突然に知らされた少年鑑別所への入所と4週間の入所の間（＃9）。卒業を前にした児相での所見の悪さ、就職の事、家庭からの引きとり拒否などという現実と、本人の気持とのズレの大きさを前にした時期（＃22～＃25）。</p> <p>外的な状況からの終了があり、その「別れ」に際しては後々まで彼のことが心配であった（＃45）。</p>
I	<p>Iさんが泣くという手段での時間延長を2回目にした後、施設職員に対しても（頼れる大人に対して）話が2～3時間になると聞き、時間延長がCoとの関係だけではないことを知り不安になる。</p> <p>最終回別れに対する抵抗から熱の出たIさんに対しCoの方が感情的になり泣いてしまった時。</p>

表8 甘えと攻撃

対象	甘え	攻撃
A	Coによりかかってストーブの前で寝る(#7)。「トイレに行くから一緒についてきて」(#13~)。 だっこやおんぶをして欲しいと言う(#21)。	(箱庭)「やれー」と言いながら戦士を置く(#1)。急に棚の人形をはらいのけたり、クーピーをばらまく(#4)。Coに「花さかじいさん」と言って砂をかける。ほうきで頭をたたく。攻撃的な言葉「悪かったな、おりゃあ」「パーカ」と言ったり、Coの手をかんだり、Coに向かって唾を吐く(#26)。面接室内におしっこをする(#25、30)
B	赤ちゃんのように「オギャー、オギャー」と言う(#8)。肩車やおんぶをしてほしいと言う(#14~)。 赤ちゃんのようにダラーッととして「起こして」と甘える。	Coにボールを投げつける(#7)。Coを玩具で殴ったり、手を噛む。霧吹きでCoに水をかける。鉄をCoに投げようとする(#12)。Coに「パーカ」と言う。
C	髪の毛が痛い。友達に引っ張られてと甘える(#10)。髪のとかしっこ。足と足を重ねる(#15~17)。 Coのコーヒーをくれ(#37)。足をもんで(#44)。お手洗について行ってくれ(#59)。肩がこるから揉んでくれ(#60)。くすぐり合い(#68)。	ピストルをつかってCoを攻撃(#15~17)。クルミでCoをたたく(#36)。物を投げる(#58)。オシッコ(面接室から外へむあって)(#60)。おなら、うんち(トイレで)(#61)。玩具(人形)を壊す(#68)。このバカヤロー、アホタレ、バカ、チビ、ハゲ。
D	音楽を聴きながら、椅子の背をなめる。曲のリズムにあわせて、椅子に口をつけたり、離したりする(#6)。	「このキン消し、僕のだから持っていく」と言うCoが持ち出せないと説明すると口に入れる。プッと床にキン消しをふき出す(#5)。「今日はこれまで」とCoの質問をさえぎる(#7)。キン消しを手に隠し持っており、ドアから出る際に、パッと手の指を広げて床に落とす(#7)。 面接のはじまる時に「今日はこれでおしまい」と宣言する。「うるさい!」「これでおしまい!」「おしまいです。うるさい!」(#8)。全体を通して、動物同士、動物と人間(ロボット)を闘わせて遊ぶ。
E	かゆい所をかいて。Coの髪にさわりたいがり三つ編みをする。メッセージやリボンの交換をしようと要求。	Coを攻撃をうける役まわりにする。ゲームをして負けると、ほっぺたをつねる(#8~#22)。
F	行事に出て欲しいなどの要求。	ビーチボールを投げつける(#15~)。
G	施設側への改善を頼んで訴える(#12)。面接時間の延長(#17~26)。 「明日、車で迎えに来て!」(#19)。「しもやけ、もんでよ」(#20)。	霧吹きでCoに水をかける(#13)。面接時間の短縮(#26)。紅茶のティーバックを「もらおうよ」とポケットに入れる。 「じゃ、この眼鏡もらおう」とCoの眼鏡をかける。罰ゲーム(しっぺ)をする(#46)。箱庭のなかで攻撃場面を表現(#4~34)。
H	お菓子をおごってなどの物の要求。コーヒーを入れてなど自分のための行動要求。体にさわったり、腕相撲をする。	言葉による強い禁止と命令。ライターの火を近づける。箱の蓋で指(Co)をはさもうとする。頭をたたく。「カウンセラーなんてつまらんら」と強い拒否と不満を投げつける。
I	「住所教えて」という(#4)。120分の音楽テープをもって来る(#5)。面接時間の終わりになって重要な話題をもち出したり「家に帰りたい」と泣いたりして時間延長する(#6~11)。	遅刻(#12)。 「そんな思いまでして来てくれんでもいい!」(#13)。

表9 面接経過からみた対象児の変化

対象	変化としてとらえたこと
A	自分の要求が聞き入れてもらえないと駄々をこねるが、ある程度駄々をこねると次のプレイへと遊びを移行させながら気持ちを済ませることが出来る。
B	(#17から) 面接室から外へ飛び出すようになり、外へとエネルギーを分散させ、面接室内だけではおさまらないBちゃん健康さを感じた。#18頃からCoにボールがあたると、「ごめん」と素直にことばが出てくる。
C	要求(おやつ、おもちゃ、時間延長)するのみのA君がCoにおやつ等をプレゼントしたり、面接時間がほぼ1時間でおさまるようになり、終了時間を本人が知らせる。Coが話す内容に適切に反応し、きづかいも出来るようになる。次回の面接日の予定や将来の事について考えが及ぶようになる。
D	(遊びの内容の変化) #2 ワニと種々の動物との闘い。#9 同じ種類の動物を近くに並べ、「親と子」「親分」と表現する。動物の闘いに話し合いの場面が加わる。#10 闘いのテーマに加えて、あの世とこの世が登場。#11 闘いのテーマで滅びそうになった動物界に仙人が登場し、味方になる。#13 ブドウ、家、城を近くに隠して、地上で闘いがくり広げられる。仙人が死んだ動物に命を与え、生きかえらせる。幽霊の世界のもの(ヘビ、トカゲ)出現。
E	外向的で人なつっこく明るいという印象の彼女であったが、箱庭に豊かな自己のイメージを表現し抑圧していたものが動き出した。それをプレイに拡大し、激しい攻撃性として発散させるに至った。それと並行して、自己への客観化がわずかづつみられるところで終了となった。
F	前担当者と遊んだことをなぞるようなプレイを続けていたF君が#7から箱庭をやりはじめた。#9からは自分の家族のことを口にしはじめ少しづつ自己を語り出した。
G	面接中期(#12～#26)では、面接枠からはみ出しが多く(甘え、時間延長、短縮)CoとG君の距離が接近していたが、面接終期(#27～#47)になると、Coとの距離がとれるようになり、存在感も出てきて、同級生と喧嘩も出来るようになった。#43では「僕をどんな人間だと思う?」とCoに尋ね自分を客観的に見ようとする姿勢を示し、自立期にはいった(成長した)ことを感じる。
H	初回時のH君の印象は「明るさ」「軽さ」であった。それが45回の面接を通して最後の面接では「重く」「沈うつ」なものへと変質をとげていった。「不安」や「痛み」の直面化を避けていた彼であるが、面接を通してそうした感情を揺さぶり目覚めさせてしまったと思われる。
I	いじめられていた同室の子に言い返せなかったのが、言い返せるようになった。時間枠が意識されてきた。不登校のため同年令の子と感情の交流がなかったが高校進学後は「皆同じだと思った」と関係ができてくる。自分の感情をCoに訴えるだけだったのが妄想したりするのは自分を保つためであると学校への不適応は逃げではなからうか等自分の感情を整理しようとするようになる。

表10 施設内面接での長所と短所

長 所	短 所
1. 対象児が他の子と遊んでいる姿など面接の前後に観察できる機会があり現実生活での様子を知る手がかりになる。対象児の生活の状況を理解しやすい(全員)。	1. 面接を受けたくないと思っても、Coが行くために拒否しにくい。面接室と生活の場が同じ空間の中にある事により混乱をまねく。 2. 本人の来室意志より毎回面接に行くことが義務づけられたものになりがちで、対象児の中で当然おこってくると思われる力動的なものがみえにくくなる。 3. 面接室と生活の場が隣接しているため外からの影響(他児の侵入、妨害、逆に面接に友人を誘いこむなど)を受けやすい。 4. 面接室の玩具が施設のもの、個人のもの混在していて対象児が持ち帰りたいと主張するとき制限しにくい。 5. 複数の面接が行なわれるため他の面接の影響を受けやすい。 6. カウンセリングを受けていない他の施設児を刺激して施設内の心理的力動が大きく動き面接にも影響する。

表11 心理学的援助の意義

プ ラ ス 面	マ イ ナ ス 面
1. 継続した1対1の関係が持てる。 2. 安全な場が保障され抑圧した感情が放出できる。また感情放出の対象が得られる。 3. 感情の支え、心の癒し。 4. 子どもが面接を受け入れて楽しみにしてくれる。 5. 集団生活では表出しにくい感情(甘え)が出せる(疑似母子体験の場)。 6. 内的世界が安心して表出できる。	1. 施設職員の方針とカウンセリングが合わない面があるかもしれない(カウンセリングは甘やかす等)。 2. カウンセリングの非現実の場と現実の寮生活の場が同じため、両次元のギャップが大きいであろう。 3. 対象が甘えたり退行したりする場合(面接者)の受け皿が不十分(一般家庭と異なる)。 4. 危ういバランスをとりながらも健康に生活してきた彼らをカウンセリングすることでその均衡をくずし、混乱させるばかりではないか。 5. 「受容的な人」という仮面をつけて子ども達の心性の中に土足でふみ込む行為をしてはいないだろうか。 6. 対象児がCoへの依存が高まる程、Coの卒業、就職等による面接の中断でさらにつらい別れを体験させる。

であると考え、そのような心理学的援助の意義（效用と限界）について、各人の経験からまとめてみたのが表11である。

IV. 考 察

1. 施設入所児の抱えている問題

表1の事例の概要に見られるように、対象児のほとんどが早期に親から離され、集団生活を強いられている。また彼らは施設入所以前も決して、安定した家庭生活を過ごしていたとはいえない。対象児のほとんどは、家庭崩壊の現実に直面して、帰りたいと帰る家庭が存在しないか、存在していても彼らを受け入れてくれるだけの余裕がない。彼らが背負わされている重荷は、想像以上のものであり、多かれ少なかれ継続的なフラストレーション状態にあることが推測される。従って、表4で示した施設側から提示された彼らの問題は、生後まもなくからの苛酷な状態に置かれた彼らの痛切な訴えであり自分を守るための手段であると考えらるべきであろう。

彼らの多くは情緒不安定（多動、いらいら、おちつきがない、感情の起伏が激しいなど）であり、対人関係がうまく結べない（視線が合わない、表面的、心を開かない、友人ができないなど）と言われているが、そのような状態が生じるのは、当然のことである。施設養護においては、衣食住の機能は、まず保障されてはいるが人格形成にとって最も重要である安定した個別的な環境は保障されていない。Rutter, M (1972) は、「養育者が実の母であるかどうかの問題ではなく、養育者が頻繁に変化するところに子どもの問題形成の原因がある」と指摘しているように、職員の頻繁な転出入、交替勤務制などは子どもたちが一人の大人、養育者との間で培われていく基本的信頼感を抱く状況ではなく、上記のような性格上、行動上の問題が生じていると考えられる。

2. 面接における対象児とCoとの関係性

対象児とCoとの関係は、わずか週1回の限られた時間と空間の枠の中ではあるが、徐々に深まっていき、回を重ねるに連れて相互に心の深いレベルでのつながりが形成される。面接回数、長さ、Co自身の生活経験、パーソナリティなどによって、また対象児自身の抱えている問題の大きさによって関係性のレベルには相違がある。

表5に示したようにCoは対象児との面接を通してひとりの人間対人間として相互に触れ合う深い感動を体験している。それは決してCoが対象児を一方向的に援助しているということではなく、相互に関わりあっているからこそ得られるものであることが窺われる。

表6の「印象に残っていることばやできごと」では、対象児の背負っている、どうしようもない重く痛々しい現実や深い心の傷が生々しく表現されている。Coとの面接が始まってしばらくして奇しくも生まれて初めて実の母親が現れたというAは、男女の人形を離れないように赤いリボンでしっかり結び「結婚したら好きな人と一緒に風呂に入るんだよ。好きな人ができたらその人と一緒に暮らすんだよ」と両親に対する無意識的思いを述べ、自分を捨てていった母を「あの人がお母さんじゃなければよかった」と訴える。父母ともに行方不明で面会も帰省先もないCは、万引・嘘言などで、くりかえし罰を受けているが、プレイの万引のシーンでは、「お母さんがいなくて寂しかったんで、一度お金をとってみたかった」と心情を吐露している。両親ともにいないFの「お父さんは4年生の時死んだよ。お母さんは・・・オレ一度もみたことがなかった」といった言葉は、その哀しみの深さに応じる言葉もないほどである。山下(1994)はCとのプレイの中でくり広げられる「母親殺し」について「求めても求めても得られない哀しさをいつもひたひたと感じているだろうと思います。そしてその哀しきは不思議な位明るい表情の奥深くに閉じこめられているのでしょう。日常の生活から殆ど追っ放っていた哀しみが、毎週1度行われるプレイの中で少しずつ浮上してきて、それがA児（本文ではC）にとって一番の核心である母親のイメージとつながるとどうしようもない程、イライラ落ち着かないのではないのでしょうか。その結果が私に向けられるいわれのない攻撃であったり、極端な甘えではないのでしょうか。そして、そのようにA君の気持ちを左右に引き裂こうとする母親は殺してしまわないと自分の安全を脅かす存在になってしまうのでしょうか」と述べている。また、自分でどうしてもコントロールできない感情の起伏やアンビバレントな感情をAは「私、ときどき怒りたくなるに」と語り、Eは、「本当の心は怒っているんだよ」と言語化している。

中学3年で進路決定を迫られているHやIは「『情熱の薔薇』を聞いた後で何かが起きる。それはすごくいいことだしすごく嫌なことでもある」、「いいことがあると必ずあとが恐いからな」と両価的な出来事によって引き起こされる葛藤や不安を予期しており、彼らのこれまでの生活経験から実感をもって語っている。BとGは、帰っていく家庭があり、不十分ながら母親との接触もあるので施設生活は一層不満であるし、他児への気遣いも強いことが窺われる。Dは、援助者の就職によって現在のCoは3人目であるが、Coがまた来なくなってしまうのではないかという不安を「先生も来るの忘れないでね」

ということばで伝えているし、また面接室の遊具は共有のものであることから、他の誰のものでもない「僕だけ用」のものを欲していることが痛いほどよく伝わってくる。

対象児は様々な問題を抱えながらも、表面的には明るく健康な生活を送っている。しかし、1対1の個人療法的な関わりが深まっていけばいくほど、彼らが内面に抑圧していた激しいnegativeな感情は放出される。また面接が施設内で行われるために生じてくる問題もある。Coが面接中どのように応じてよいのか当惑したり、不安感を抱いたり、また関わっていても彼らにとってはほとんど役にたつ存在とはなり得ないのではないかという援助者として無力感を感じたりしたことについて表7にまとめてある。これらの不安や無力感は援助者自身のキャパシティや面接の時空間的問題を除いて、対象児自身が抱えている奥深い孤独感、寂寥感に触れた時に感じられるもので、このような無力感は彼ら自身が自らの存在そのものに抱く感情が投影されたものであろう。

面接過程で生じた「甘えと攻撃性」は表8に示すように面接中対象児全員が表出している。「甘え」は抱っこやおんぶ、身体への接触を求める退行的行動やお菓子や物(玩具)の要求、Coの住所、電話番号を教えて欲しいがる、面接時間の延長、面接日以外も来て欲しいという要求など面接枠を越えるものまで多様である。

「攻撃」にも様々な形態が見られる。プレイの中で攻撃場面を設定し、Coを攻撃を受ける役割にさせて攻撃するもの、箱庭の中で戦いを表現をするもの、罰ゲームを取り入れてシッペや頬をつねるなど、また面接時間中におしっこ、うんち、おならをしたり、唾を吐く、水や砂をかける、物やボールを投げつける、Coの手を噛んだり、箱の蓋でCoの指をはさもうとする、ライターの火をCoの腕に近付けるなどCoの身体へ直接に攻撃を向けるなど激しい攻撃が放出されている。また「悪かったな、おりゃあ」「バカ」「チビ」「このバカヤロー」「アホタレ」「うるさい!」「これでおしまい!」「きてくれんでもいい!」「カウンセラーなんてつまらんわ」など言語による攻撃の表現も見られる。

同一の面接場面で甘えていた子が急に攻撃的になったり逆の場合もある。攻撃的場面の続いた面接の次の回は甘えが強く出るということもあり、甘えと攻撃が混在している。このような「甘えと攻撃」から対象児とCoとの関係性を窮い知ることが出来る。

深谷(1974)は、遊戯療法過程における一般的モデルとして摸索期、行動化期に続いて攻撃性拡大期をあげ「セラピストとの治療関係に充分支えられると新しい行

動が開発される。しかしそれは建設的なものではなく多くはそれまで抑圧していた攻撃性が発揮される。そのことは子どもが自己受容能力を高めたことを示している」と述べている。また「甘えと攻撃性」は筆者らの臨床実践(小椋他1982、大西他1992)にも共通して見られた現象である。しかしその現れ方は対象児により異なっており、また表出される時期についても違いがあるようだが、それについては今後検討し明らかにしていきたい。

面接経過から対象児の変化がどのように見られるかは表9の通りである。カウンセリングの一般過程としてはクライアントの側における変化として伊東(1964)は①感情を自由に表現するようになる。②表面的、外的、非自己的話題から自己に関したより深い感情を話すようになる。③知覚が分化し、正確に象徴化しはじめる。④自己をあるがままに見はじめ他からの脅威も充分見きわめ、防衛的態度が減少する。⑤否定的感情の中にわずかな肯定的感情が表現され、この肯定的感情が進展し、積極的な行動が始まる。⑥自己理解、自己受容、洞察が進み、積極的統一の行動が現れる。⑦助力の必要を感じなくなりカウンセリングを終結したい気持になると述べている。このプロセスから見ると、事例G、Bは終結事例である。また外的事情により終了になったE、H、Iも上記のプロセスの後半に到っていることは明らかである。4年間に及ぶ面接が続いているCの内面の変化は驚く程であり(山下1994)、現在継続中の他の対象児もかなり安定した信頼関係が形成されていて、彼らがこれまでに経験したことのない暖かで守られた場の中で心の癒しがなされつつあると言えよう。

3. 施設児に対する心理学的援助の意義

本来、心理療法(カウンセリングや遊戯療法その他)は、何らかの問題(主訴)をもった本人あるいは親が自主的に来談することによって始まる。ところが、我々は、いわば押しかけカウンセラーであるために、表10の短所であげたような多くの問題が生じてくる。対象児が来室したくない時や忘却している時でも、Coは出かけて行って面接するので、対象児のそのような意識的、無意識的反応に働きかけてしまうことになる。また、面接室が生活の場と余りにも近すぎるため、外からの影響を受けやすく、面接室が「安心できる保護された空間」となりにくい。このことは、学校の中にある相談室の問題とも共通するであろう。

施設に暮らす子どもたちの多くは一見とても明るく人なつっこく、礼儀正しい。彼らはくったくなく健康的に過ごしている。われわれが、施設で面接を始めた当初は少なくとも彼らの方から悩みを訴えて来室した者はいな

かった。彼らにとってカウンセリングとは何なのか、得体の知れない、しかし、何やら心ひかれる場であったようである。やがて特別に選ばれた対象児がカウンセリングを楽しみに待つようになると、その恩恵に浴したいとCoたちに直訴してくる子どもも現れた。対象児たちとかわる中で、彼らが共通に抱えている問題が明らかになってきた現在、やはり1人でも多くの子どもたちに、できれば全員の施設児が、1対1の個別で継続的な援助を受けることができると考えている。

表11には、そのプラス面（効用）とマイナス面（限界）をとりあげたが、援助者は特にマイナス面を心にとめて、よりよい援助ができるよう考えていく必要がある。特に、施設職員とどのようにうまく連絡をとっていくか、あるいは、子どもたちに関わる周囲の人にどのように働きかけていけばよいかは1つの課題である。われわれは、試みのひとつとして、年に数回施設職員との合同のカンファレンスを開き、相互のコミュニケーションの場をもつようにしている。子どものかなり深い精神内界につきあっているわれわれが、その際どれだけ子どもたちの側にたって話し合いを行うことができるか、彼らのプライバシーをどのレベルまで守りきることができるか、それは、われわれに荷せられた責任である。

V. おわりに

近年養護施設の中には、常勤ないしは非常勤の心理の専門家を採用するところが、少しずつ増えて来ている。これまで、述べてきたような背景をもっている養護施設児にとって一貫したメンタルケアをしていくことは、われわれ大人の義務である。そのためには心理学的知識と技術、経験を積んだ専門家が必要であろう。

まだ心理臨床を学び初めて日の浅いCoたちにとって対象児との出会いは、大変貴重な経験であり、多くのことを学ぶ場となった。

今後それぞれの面接経過を詳細に検討することにより、彼らにとってどのような心理学的援助が望ましいかについて明らかにしていきたい。

文 献

- 1) 深谷和子 (1974) 幼児、児童の遊戯療法. 黎明書房
- 2) 伊東博訳編 (1964) カウンセリングの過程. 誠信書房.
- 3) 日本子どもを守る会 (1994) 子ども白書. 草土文
- 4) 大西俊江・伊藤俊子 (1992) 施設収容児に関する心理学的研究—箱庭とプレイにあらわされた家族イメージ—. 島根大学教育学部紀要 (人文・社会科学) 第26巻・75~85.
- 5) 小椋たみ子・大西俊江 (1982) 吃音児の遊戯療法過程の研究. 島根大学教育学部紀要 (人文・社会科学) 第16巻. 55~69.
- 6) Rutter, M. (1972) Maternal Deprivation (母性剥奪理論の功罪. 誠信書房.)
- 7) 山下由利子 (1994) 家族に関する心理学的諸問題—養護施設児の「家族」イメージの変化の過程について—. 島根大学教育学部修士論文.